
DEVIL × HUNTER (仮)

osakari

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL×HUNTER (仮)

【Nコード】

N1979X

【作者名】

osakari

【あらすじ】

教皇暗殺事件から2年。ネロはフォルトゥナの復興や騎士団の再編に携わりながらも、彼の故郷でデビルメイクライを運営していたはずが、気付くと異邦の地へ。なんやかんやの末ヨークシンシティに新店舗を構えたネロはデビルハンターとして悪魔を狩りつつフォルトゥナへの帰路を探す。

デビルメイクライ ヨークシン支店

暗殺、工作、探偵、要人警護エトセトラ。噂では迷い猫探しや老人介護なんかもするらしいが、あくまでも風説であって真偽は定かではない。腕っ節は悪魔も泣き出すほどに立つらしく、依頼達成率は100パーセントを誇る。店の名はずばり。

ヨークシンシティ。ヨルビアン大陸西端に位置する世界有数の巨大都市は眠らない。深夜零時を過ぎてもなお喧騒に満ち、人工の灯りで夜空は赤銅色に滲んでいる。金曜の夜ということもあり、ダウンタウンは人でごった返していた。

テクノに煽られたネオンサインが姦しく点滅するメインストリートを、人波を縫うようにして一人の青年が闊歩する。靴底に何か仕込んでいるのか、踏み出すごとにワークブーツの踵がカツカツと音を立てる。青年の髪は混じり気のない白銀で、濃紺のトレンチコートによく映える。カデットブルーの瞳を持つ美男と呼んで差し支えない顔立ちや、大型楽器のキャリングケースを背負った彼の姿は本来人目を引くものであったが、不思議なことに彼に注目する者はほとんどいない。

着込んではいるものの霜月の夜は冷えるのか、吐く息は白く、鼻の頭は赤くなっている。早いところ用事を済ませて燃えるようなホットウイスキーを飲みたい、と青年が思ったかどうかは不明だが、緩んできた黒の襟巻きをきつく締め、楽器ケースを背負いなおし、やや歩調を速めた。目的の場所は近い。

高層ビルの隙間を抜けて5分も歩くとうら寂れたアヴェニューに着いた。彼の故郷の旧市街地を彷彿とさせるそこは、しかし彼の故郷とは異なり、違法薬物と不法滞在者で溢れている。市内でも屈指の貧民窟は相変わらず暗く淀んでいたが、平素と異なり今宵は人の子ひとり見当たらない。

夜霧を踏みしめる。踵が鳴ってコンクリートに木霊する。どこか挑発めいた音。不意に立ち止まる。キャリングケースに左手を掛け、宙を仰ぐ。

頭上に影が降り注ぐ。

ノータイムで楽器ケースを振り上げれば鈍重な衝撃音とともに不細工な悲鳴が上がった。力いっぱい打ち上げられたそれが路地を舞うのと同じ、青年の四方に突如として4つの気配が現れる。

「It
」

地面から垂直に打ち上げられたキャリングケースを今度は地面と水平に構え、自身を軸に新手を薙ぎ払う。

「i s a s h o w t i m e !
」

夜霧の向こう、前後左右の空中に赤い紋様が浮かんでいる。簡易の地獄門。奴らはそこから現れた。路地にしたたかに打ち付けられたそれらは「グギヤア」と獣のような声を上げ、また声に混じってガチャガチャと金属音が聞こえる。青年はケースを地面に置くと素早くロツクを外し、一振りの剣を取り出した。赤の女王レッドクイーンの名を冠す、よく手に馴染む騎士刀。刺突の要領で空に突き出し、最初に打ち上げたそれ串刺しにすると、残り4体に向かって青年は駆け出した。

剣の軌道は寸分たりともぶれず、かつ人並みはずれたスピードで敵を食い破る。後続4体を切り伏せた斬撃のモーションに合わせてグリップを握り込むとギミックが作動し、魔改造された刀身が急激に熱を持つ。貫かれっぱなしだった最初の一体が断末魔を上げて弾け飛んだ。その依り代になっていた麻袋や鉄パイプが通り一帯に乱雑に散らばるが、スラムの景観としては何ら問題がない。

「T o o e a s y ! つて、これで全部か？」

次の襲撃を待つがとんと音沙汰がない。それどころか人の気配が戻ってきた。わざわざレッドクイーンまで背負って張り切って出てきたというのに。急激に萎えた。主人のモチベーションに倣うようにレッドクイーンもまた刀身の熱を収め、まるで意気消沈を唱えるようであった。

青年は舌打ちをするとすっかり冷たくなったレッドクイーンを楽器ケースに戻し、乱暴に蓋を閉じ、彼の幼馴染が聞いたら卒倒するであろう語彙の数々で口汚く罵った。

「んだテメー喧嘩売ってんのか！」

退屈なハントに対する下品な愚痴が聞こえてしまったらしく、建物の二階からスラムの住人に野次を飛ばされる。

「アンタに言ったんじゃねーよ！」

怒鳴り返して踵を返す。久方ぶりのハントであったというのに、とてつもなくダサイ獲物だった。帰ったらホットウイスキーを流し込んで早々に寝てしまおう、とおそらく青年は思っただろう。吐く息が白い。不貞腐れて帰路に行く。

ふたたびメインストリートに出たところでポケットが振動した。携帯電話を取り出しサブディスプレイを確認するとホームコードからの転送だということが分かる。青年の所有するホームコードは仕事用の一つだけ。つまり依頼の電話だ。

彼は暗殺、工作、探偵、要人警護、場合によっては化け猫探しや憑きモノに悩む老人の世話なんかもする腕利きのハンターである。腕っ節は悪魔も泣き出すほどに立ち、受けた依頼は100パーセント達成するのをモットーとしている。

「Thank you for calling Devil May Cry. 何の用だ？」

店の名はずばりデビルメイクライ。恩人から看板をわけて貰い、所謂なんでも屋の2号店をヨークシンで開業して早半年。数名の顧客を得てようやく軌道に乗り始めたところであるが、未だに店の趣旨を無視した電話が掛かってくる事もしばしば。

「迷い猫？ 悪いが他をあたってくれ。はあ？ うちの探偵じゃねーよ」

顔をしかめて終話ボタンを押す。化け猫狩りの依頼なら喜んで受けるが生憎と迷子の子猫探しについては門外漢である。色々矛盾するようだが、彼は探偵でもなければもちろんなんでも屋でもない。

「まったくロクな依頼が来やしねえ。やっぱりダンテの店の名前なんか借りるんじゃないかった。ぜってー呪われてるだろ」

この場にいない恩人の名をばやきながら背中中の楽器ケースを背負いなおす。入れ方が乱雑だったのか、ケースの中の女王が収まりの悪い音を立てた。

「Sorry sweet. I'll ask you out
again soon」.

青年の名はネロ。ヨークシン市にて通称何でも屋ことデビルメイ
クライを経営する、腕利きのデビルハンターである。

デビルメイクライ ヨークシン支店（後書き）

タイトルを『こちらヨークシン市デイルード公園前デビルメイクライ2号店』にしようかと思ったけどあまりの語呂の悪さに断念。

デビルメイクライ ヨークシン支店 2

1994年11月15日

一月ぶりにスラムの狩場に行く。右手の反応は極めて微弱。先月同様雑魚しか湧かない。これで近々力場が完全に消失すれば、仮説が一つ証明される。

短い日記を書き終えるとネロは手帳を閉じた。黒の紙表紙の安っぽいそれは、テナント1階に店を構えるレコードショップで買った粗品である。金色のゴシック体で“カーネギー・レコード”と店名が入っている。

レコードショップの店主である3代目カーネギーは、ネロに言わせると「悪食の偏屈ジジイ」である。というのももヒットチャートに載るような流行曲はほぼ置いておらず、到底買い手のつかないような珍妙な作品ばかりを豊富に取り揃えているのだ。

以前に一度、ラジオで耳にした流行のロックバンドの新譜を取り寄せてもらおうと店主に頼んだことがあった。親の敵を見るような顔で断固拒否されたのは記憶に新しい。

ペンを置く。卓上のボトルに左手を伸ばす。

「おいおい、マジかよ」

残念なことにもう酒は空だった。冷蔵庫の中身を思い出そうとして、思い出す中身がないことを思い出した。

去年まではダンテの店が年がら年中火の車なのを笑っていたもの

だが。対岸の火事が実は我が身に降り注ぐ火の粉だったというオチだ。

空のピンを卓上に下ろし、代わりに紐で括られた紙束を取り上げる。包帯を巻いた右手の指先で器用に紐を解き、中身をあらためる。

? Factors for which demons show
up here in A/W (異世界における悪魔の発生要因)
? How N and D/P differ from each (念と魔力の相違点)
? Hearsays about demons and situations (悪魔関連の噂とその検証)
? . . .

トピックごとにリストアップされた複数の考察。

なにかの拍子に他人の目に触れればもれなくキチガイかサタン信仰者、あるいは中二病患者に認定されかねない内容が延々数十ページに渡って続いたため、それらはすべて彼の母語たる英語で記されている。

とはいえ世界共通語であるハンター語の登場以前には、英語と酷似した言語が複数の国家で使用されていたというし、アルファベットはいまだ宣伝文句や商標に広く用いられている。つまり見る人が見れば容易に解読可能なのだ。

そこで気休め程度ではあるがdemons (悪魔) やanother world (異世界) などといったファンタジー極まりない単語は適当にぼかして記入するようにしている。

魔剣教団内の汚れ仕事を一手に引き受けていた時代の癖が抜けな
いのか、情報管理に関するネロの意識はそれなりに高かった。

もう一度ペンを取り項目その2にいくつかの文章を付け加えると、ネロはベッドに倒れこんだ。安物のスプリングが悲鳴を上げる。

電気を消しても、窓から差し込む街灯のせいで見上げる天井はぼんやりと明るい。灰色の染みの数を数えながら今後の身の振りを再考する。

悪魔狩人としての仕事がないわけじゃない。ただこちらでの悪魔の認知度はフォルトウナのそれと比べると圧倒的に低いのだ。そもそも現れる悪魔の個体数や頻度からしてまるで異なる。自ずと依頼の数は減るし、すると生活も難しくなる。

ネロが人並み以上に誇れるものといえば、悪魔に関する知識と、無駄に頑丈な体と、教団時代に培った後ろ暗いスキルくらいなものだ。潰しが利かない。

というか彼がこちらに来たのがそもそも悪魔狩りの真つ最中であったことをふまえると、ネロがこちらへ来てしまった原因を探るためにはやはり悪魔狩人を続けるのが得策に思える。

原因を探る、と言っているが、そう、いまだに明確な原因すら特定できていないのだ。よって現状対処のしようがない。

ばふ、と頭を枕に打ち付ける。堂々巡り。寝る前にあれこれ考えると泥沼にはまる。さっさと寝てしまおうのが吉なのだ。でないに夢にまで見る。

「いずれにせよ先立つものは必要か」

ド田舎のフォルトウナからヨークシンというメトロポリスへ、ある種の栄転を遂げたネロであったが、都会生活を満喫するには色々クリアしなければならぬ条件がある。所変われば品変わるとは

いえ、世界が変わっても金の価値は大体一緒であった。

世知辛い真実を見据え、ネロは明日からの行動を決めた。

（天空闘技場に行こう）

その晩ネロは帰天したアグナスとP & a m p ; K O戦を繰り広げる夢を見た。K Oしないぎりぎりの力加減でフルポイントまでボコったのは言うまでも無い。

デビルメイクライ ヨークシン支店 2 (後書き)

独自設定やネロの置かれた状況、H×HとDMC両世界観の擦り合わせ等は徐々に作中で解説していきます。

デビルメイクライ ヨークシン支店 3

土曜日、早朝。空腹で目を覚ましたネロはキャビネットを漁る。

週末のプランチくらいストリート沿いのオーブンテラスでのんびりと過ごしたいものだが、そうは問屋が卸さない。ネロはここ半年ほど慢性的な金欠にあえいでいる。

もちろん週休6日の誰かとは違い定期的にアマチュアハンターとしての仕事を請けているし、デビルハンターとしての仕事も月に2、3はこなしてはいるものの、各種情報の買収や魔具の材料購入やらなにやらで常に物入りなのだった。

シリアルの空箱を後ろ手に投げ、ゴミ箱にシュートを決める。ここにはエッグとポテトの調理方法を探ねてくれるウエイトレスはいない。

しかし幸いにも今日は土曜日である。ベイロークデイストリクトのファーマーズマーケットが週に一度の賑わいを見せる日だ。焼きたてのバケットや自家製の燻製、搾りたてのフレッシュジュースを格安で満喫できる。

紙幣の数枚ズボンのポケットにねじ込むと、赤のダウンを着込みブーツの紐を締めた。

テナントを出ると途端に感じる、ひんやりとした朝の空気が心地よい。1階のレコードショップはまだ開いておらず、ウィンドウに飾られた蓄音機はだんまりを決め込んでいた。

腹ごしらえを済ませてデビルメイクライに戻る。時刻は午前10時を過ぎた辺り。

思い立ったが吉日というので、昨夜決めたとおり天空闘技場へ旅立つ用意をする。数日分の着替えとタオルに洗面道具、そして来年の始めに受験予定であるハンター試験の受験要項をボストンバッグへ詰め終わると、今度は楽器ケースを開いてレッドクイーンと愛用の改造銃・ブルーローズを丁寧に仕舞い込んだ。

この楽器ケースが優れもので、またネロが金欠にあえぐ理由のひとつでもあった。一見コントラバスの運搬ケースにしか見えないそれは一流の職人によって作成された武器ケースであり、耐水、耐熱、対衝撃、対銃弾等の基本的な物理耐久はもちろん、下級悪魔相手ならば盾として槌として、十分実戦に耐えうる超スペックを誇る。また近頃民間レベルに広く普及しつつあるX線スキャナに対しての偽装も完璧という、ぜひともフォルトゥナに持ち帰りたい一品だ。

それだけに値は張り、目下2年ローンを返済中である。ローンを組む際の必要書類の保証人欄にはとあるプロハンターの名を貸してもらった。

ダンテの魔武器のように純魔力で構成されるマジックアイテムならば取り出し自由だが、ネロの得物はいずれも科学技術によるものであるため必要に応じて出したり消したりということは出来ない。ただ一振りの例外に閻魔刀ヤマトがあるが、彼が閻魔刀を抜くのはデビルトリガーを引いて魔力を爆発的に運用している間のみであるため使い勝手がよろしくない。

武器の所有・持ち歩きに関する規定は国家によって様々であり、場所によっては単純所持が刑罰の対象となる。しかしこの楽器ケースがあれば（当然違法だが）煩雑な手続きやらなにやらを吹っ飛ばすことが可能。そうだった理由で、プロ資格を持たないネロがハントのために世界各国を飛び回るには必須のアイテムであった。

もっとも来月の試験に受かってプロ資格を手に入れば無用の長

物と成り果てるかもしれない。プロハンターの地位はあらゆる超法規措置をはじめ、ハントに対する最大の援助を約束する。2年組口ーンも最悪資格にオマケで付いてくる資産運用コンサルに丸投げしてしまえばいい。

2年ローン。2年とは、ネロが見積もった帰還に要する最短時間である。

最短2年。この数字を導くに至った根拠をいくつか挙げる事が出来る。が、最大の根拠は 勘。身も蓋もないようで、これがなかなか馬鹿にできない。

もともと勘は冴えるほうであったが、件の日 彼の右手が異形へと変貌を遂げた日 以来、ネロは自身の勘が悪魔的に冴え出したのを自覚している。特にどういいうわけか、こちらへ来てから彼の勘の良さ、こと悪魔に関する勘の鋭さは格段と強化された。

2年。既に11ヶ月が経過した。2カ月後のハンター試験でライセンスを取れば、この数字も多少の現実味を帯びてくるだろう。楽器ケースを閉じ、ロックを掛ける。これで荷物は全部だ。次いで固定電話の受話器を取り、メッセージを吹き込む。

「デビルメイクライ。生憎だが数ヶ月留守にする。用のある奴は伝言を いや、これじゃダメだよな」

どうにも無愛想になってしまふ伝言に頭を悩ませつつ、数回のリテイクを経て、ようやく客商売らしいまともなメッセージが登録された。そもそもネロを頼ってくる人間など彼の腕を買っているか、あるいはよっぽど切羽詰っているかの2通りしかないのですマイル0円とか社畜精神とか、所謂サービス業的なスキルはあまり必要でない。

デビルメイクライの入り口にClosedの札を下げ、油性マジックでホームコードを書き添える。試験の最中でもなければこれで緊急の依頼にも対応可能だ。緊急の、とは即ち悪魔関連である。

ボストンバッグとキャリングケースを持って階段を下りる。3代目カーネギーが本日の営業を開始したらしく、レコードショップの蓄音機が平生通りにクレイジーな音楽を吐き出している。当然ネロの趣味には合わない。

「おいオツサン、しばらく店空けるから、用があったら名刺の番号に連絡入れてくれ」

レコード店の入り口から薄暗いカウンターに向かって声をかけると、ややあつて3代目カーネギーが「おう」とバリトンで返事を寄越した。カーネギーは悪食で偏屈なクソジジイだが、彼が仲介する依頼には“アタリ”が多い。

時刻は午前11時。これから地下鉄を乗り継ぎリンゴーン国際空港へ向かう。そこから飛行船で北上し、天空闘技場を目指す。ある程度の活動資金を稼いだら、あとは2カ月後のハンター試験に備えるだけだ。

ビルメイクライ・ヨークシン支店、しばしの閉店である。

デビルメイクライ ヨークシン支店 3 (後書き)

やったー次で原作キャラでるぞー

二束三文のオートマタ

「赤コーナー！ 一週間前に突如現れた謎の新人！ 右腕のギブスは一向に外れないネ口選手、今日もまた左腕一本！ 指先一つで相手をダウンさせてしまうのかー！？ 圧倒的な強さと場違いなルックスで人気も嫉妬もうなぎのぼりの超注目株がリングに上がったアー！」

実況が煽り、観客席が熱狂に包まれる。歓声、絶叫、口笛に罵声を無駄に目立つのを避け、異形の右腕にはギブスをはめた上から包帯を巻いている。そのため結果的に片腕で闘うことになる。200階未満では武器の類は使用禁止であるから、愛用の剣と銃の出番はない。よってガチンコの肉弾戦を要求される。これはネ口の望むところであった。というのも、彼の趣味のひとつがプロレスなのだ。

闘技場の参加申し込み用紙には格闘技経験の有無と修練の年数を記入する欄がある。ネ口が魔剣教団の見習い騎士ベイジになったのは8歳の時で、潔癖な騎士団に馴染めず教団の汚れ仕事を一手に担う暗殺者に転身したのが12の時。そしてプロレスにはまったのは比較的近年。15の頃であった。結局ネ口は経験格闘技をレスリング、修練年数を約10年としてエントリーした。

初戦、審判の合図と同時にダッシュ。慣性のままにドロップキックを繰り出したところ、加減を誤り対戦相手の顔面に土砂崩れを起こした上で病院送りにしてしまった。不幸中の幸いで頸椎が擦じ切れるような事態は避けられたものの、いつやらかしてしまうか分かったものではないので以後自粛している。ダンテ相手ならば全力で繰り出してもまるでダメージの通らないネタ攻撃だが、人造悪魔共の放つエネルギー弾を蹴り返すポテンシャルを考慮すれば使用を控

えて然るべきであった。以後左腕一本で連勝を重ね、付いた異名が

「審判がK・Oを宣言し試合しゅりょー！ ストレートで100階への進出決定！ やはり“片腕の悪魔”の名は伊達ではない！」

片腕の悪魔。打って付け。至当である。

天空闘技場。251階を擁する高さ991mの塔で、建造物としては世界第4位の高さを誇る。人によつて「野蛮人の聖地」や「格闘のメッカ」など呼び方は様々でもものの、要は力こそ全ての戦闘地帯である。

200階未満のフロアでは素手での格闘を行い、勝利すると上の階へと進むシステムで、階が上がるほど高額なファイトマネーを得ることができ、100階を超せば個室をはじめとした様々なサービスの提供を受けられる。230階から250階には階毎を占有するフロアマスターが存在し、200階以上で10勝するとフロアマスターへの挑戦権が得られる。フロアマスターとなることは格闘家としての最高の栄誉というのが通説だが、この限りではない。

なお、観客動員数は年間でのべ10億人を超え、世界有数の観光名所としての一面も持つ。国営施設のため試合を賭けの対象にした賭博行為が公認されている。闘技場内外には飲食店を筆頭に大規模なアミューズメントや宿泊施設が充実しており、一種の小国家の様相を呈している。

ネロは闘技場から約徒歩10分の距離に見つけたパドキア家庭料理を提供するレストランを鼻臍にしている。野菜とチキンのたつぷ

り溶け込んだ田舎シチューに、フォルトウナに残してきた幼馴染を思い出しているのかもしれない。

普段はひとりで歩く道だが、今日に限っては連れがいた。ネロの半歩後ろを銀色の頭がびよびよこと着いてくる。ネロの白銀とはまた違う、クロムの溶け出したような銀の髪。少年の名はキルアと聞いた。

「国家の収入の5%をまかなうとはいえこんな施設あつたら治安がヤベーだろ。なんでお前みたいなチビがいるんだよ」

キルアは「ガキ扱いすんなつづの」と子ども扱いに不貞腐れつつも、ネロの疑問に答える。彼は齡7つにして闘技場歴1年を過ぎた古参である。

「いや、ここに来てるヤツらはケッコーまともだぜ？なんたつて好き好んで審判付きのリングの中で、決められたルールに則つて闘つてるんだ。根っからの殺人鬼や武器愛好者からは退屈すぎて倦厭されてら」

「200階以降はまた話が変わってくるんだろ？」

「そりゃそーだろうけど、200階に行くヤツなんて数が限られてるし、そもそもこの参加者はツラが割れてるうえに賭博の対象にまでなつてるんだぜ。試合の様子やファイターの顔、名前、経歴なんかは闘技場メディアがこぞつて調査・報道してるから犯罪抑止力にもなるだろ」

「……お前本当は何歳だよ」

7歳児の発言とは思えない。先ほど140階で行われた試合を観戦していても感じたことだが、キルアは早熟過ぎる。細い手足やネロの腰ほどまでしかない上背からは考えられないほど巧妙で強烈な戦闘スタイルには目を疑うばかりだ。基本的に冷静で、考察力もあ

る。

ネロの感嘆に気を良くしたのか、キルアは猫のようなどنگり眼に笑みを浮かべる。それだけを見れば歳相応に愛嬌があるのだが、半ば駆け足でネロの正面に回りこんだ少年の口は悪辣ににやついていた。

「ま、たまーにルールを無視するバカはいるけどな。何せ100階を過ぎるとアホみたいに待遇が良くなる」

どんな手を使っても試合に勝ち、高額なファイトマネーをはじめとした特典を享受し続けたい、と考える連中がいる。勝利の結果の特典ではなく、特典のための勝利を求める。同じものを求めているようで本質はまるで違う。最たるが場外での恐喝やリンチ。

キルアが「後ろのコイツらとかね」とこれ見よがしに挑発すると、闘技場から下手糞な尾行をしてきた“ルールを無視するバカ”たちの気配が殺気立つ。標的はネロか、キルアか。はたまた彼ら両方だろうか。

「隠れてないで出て来いよ。全員まとめて片腕の悪魔が相手してくれるぜー？」

「は？ 俺がやるのか？」

「え？ まさか7歳のガキにルール無用のガチ戦闘させるわけ？」

「どの口がそれを言うんだよ」

「やだなーケケケチすんなって。アンタだって嫌いじゃないだろ？
ルール無用ってのはさあ」

正解である。やれやれと肩を竦めては見せたものの、ネロは満更でもなかった。全ての試合をストレート一発K.O.で終わらせてきたため欲求不満と消化不良を併発している。ルール無用は望むところだ。初戦以来の必殺の飛び蹴りを解禁するのも吝かではない。

尾行を中止したむさ苦しい男たちが街灯の下にその身を現す。数は4。ネロの勘はもう2人いる、と言っている。

「かくれんぼに付き合う気はないぜ。それとも伏兵のつもりか？」

指摘すればあからさまに気配がざわつく。キルアは笑みを深めた。

「がんばってねーオジサンたち。1対6なら万が一で勝てるかもよ？」

まんまとネロを生贄に差し出し、煽るだけ煽るとキルアは傍観を決め込んだ。

二束三文のオートマタ（後書き）

デビルHDリマスターきた！これで勝つる！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979x/>

DEVIL x HUNTER（仮）

2011年10月28日12時16分発行